

新潮 世界文学小辞典

編集

伊藤 整	手塚 富雄
河盛 好藏	中野 好夫
高津 春繁	中村 光夫
佐藤 朔	西川 正身
高橋 義孝	吉川 幸次郎

新潮社

355651

910-

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

新潮世界文学小辞典

定価3,500円

昭和41年5月20日発行 昭和52年8月15日6刷 ©

- 編 集 伊藤 整・河盛好蔵・高津春繁・佐藤 朔・高橋 義孝
手塚富雄・中野好夫・中村光夫・西川正身・吉川幸次郎
- 発行者 佐藤亮一
- 発行所 新潮社 東京都新宿区矢来町71／振替東京 4-808
電話 業務部 (03)266-5111 編集部 (03)266-5411
- 印刷所 大日本印刷株式会社 東京都新宿区市ヶ谷加賀町1丁目12番地

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

製本(株)大口製本

序

二十世紀も半ばを越え、世界文学はその文学活動の世界的関連の中で新しい発展をとげ、またそういふ新しい視点から世界の古典の再発見がなされています。戦後二十年を経る間にこれら世界の文学は広くわが国の読書界に普及し、その読者は急激に増大しています。一方、世界文学愛好者の適切な案内となり、また研究の際の正確な手引きとなる辞典は、広く求められてくるにもかかわらず、いまだ流布しておりません。小社が創立七十周年を記念して「世界文学小辞典」を刊行するに至ったのは、このような新しい時代の切実な要望に応えようとしたものであります。幸い編集委員十氏をはじめ、多くの方々のご賛同を賜わり、周到綿密な討議が重ねられた結果、次のような特色と内容を持って完成をみるに至りました。

本辞典の最大の特色は、項目の選定において、文学の世界的同時性を重視した独自の遠近法にあります。「世界」を「西洋」と同義語に扱ってきた従来の文学常識に対し、現代日本の視点から、中国、インド、アラビア、ペルシアなど古今の東洋各国の文学が、西洋と同一概念によって考慮されました。これに伴い東ヨーロッパ、ラテン・アメリカ、アフリカなど近代的な概念で考えられることの少なかった新しい国の文学にも積極的な目が向けられました。その結果、収録された作家の数は七十余カ国、三千四百に及びました。こうした独立項目の作家のほかに文学の流れと特色とを展望するため、世界三十余カ国の文学史、世界文学の主導潮流となって多大の影響を及ぼしてきた諸流派、文学の原理論ともいふべき様式、研究法などを独立の大項目として収め、文学の有機的な把握に努めました。

記述の方法においては、平易、簡略を旨としたことは無論であります。各国を通じて道標的な意味をもつ巨星たちに思い切ったスペースをさき、伝記、作品解説、特色、影響力などの各要素が立体的に働き合い、人間像とその文学が鮮明に描かれるよう努力が重ねられました。この注意は、小項目においてはいつそう考慮され、平板な一定の表現に満足することなく、文学的エッセンスを彷彿させることに努めました。また日本文学への影響、関連に対する重点的な記述にも注意が払われています。執筆者は最小の項目に至るまで可能な限りでの最適任者に委嘱し、それぞれの最新の研究成果が惜しみなく注入されました。したがってその数は四百三十余人の多きに達しています。一方、研究の際の手引きとしての完璧を期し、また作品辞典としての用途をも果たすために、年表、索引に多くのページをさきました。

この間、編集委員、並びに各国編集委員の諸氏はそれぞれの領域において全原稿を閲読校訂し、全体を高度の有機体たらしめるために全力を注がれたことは、本辞典の最大の喜びとするところであり、創立七十周年のこの年に本辞典を刊行する運びとなりましたのは、ひとえに編集委員をはじめ関係各位の筆舌に尽くせないご苦労によるものであります。小社がかねてよりの念願といたしております「世界文学大辞典」の構想のささやかな実現というほどの意味で小辞典の名を冠しましたが、その内容については、新しい時代の文学辞典として、世界文学研究に携わる方々、並びに世界文学愛好者の座右にあって広くその期待に応えうるものと信じます。しかし、なおいつその完璧を期すために、不備な点については同情あるご教示を待ち、今後に資したいと考えております。

昭和四十一年五月

新 潮 社

編集委員

伊藤 整
河盛好蔵
高津春繁
佐藤 朔
高橋義孝
手塚富雄
中野好夫
中村光夫
西川正身
吉川幸次郎

各国編集者

◇フランス文学

河盛好蔵

小林 正

佐藤 朔

中村光夫

菅野昭正

清水 徹

高島 正明

伊藤 整

篠田 一士

中野好夫

平井正穂

上田和夫

西川正身

◇アメリカ文学

◇ドイツ文学

国松孝二

佐藤晃一

高橋義孝

手塚富雄

◇ロシア文学

江川 卓

木村 浩

原 卓也

◇中国文学

奥野信太郎

小野 忍

吉川幸次郎

◇ギリシア文学

高津春繁

斎藤忍随

中村光夫

◇インド文学

田中於菟弥

◇アラビア文学

前嶋信次

◇ペルシア文学

黒柳恒男

◇中世ヨーロッパ文学

今道友信

加藤信朗

◇イタリア文学

奥野拓哉

河島英昭

◇スペイン文学

会田 由

長南 実

◇ポルトガル文学

浜口乃二雄

◇ユーゴスラヴィア文学

徳永彰作

◇朝鮮文学

許南麒

◇スウェーデン
デンマーク文学
ノルウェー

山室 静

◇ルーマニア文学

直野 敦

◇東南アジア文学

松山 納

◇アイスランド文学

森田 貞雄

◇ブルガリア文学

真木三三子

◇カナダ文学

飯島 正

山室 静

◇オランダ文学

渋沢 元則

平野 敬一

◇フィンランド文学

飯島 正

◇近代ギリシア文学

森安達也

◇オーストラリア文学
ニュージーランド文学

平松 幹夫

◇ポーランド文学

木村 彰一

◇イスラエル文学

関根 正雄

◇ラテン・アメリカ文学

会田 由

◇ハンガリー文学

徳永 康元

◇トルコ文学

護 雅夫

◇アフリカ文学

橋本 福夫

◇チエコスロヴァキア文学

栗栖 継

◇モンゴル文学

小沢 重男

編集協力者

青木 順三
飯豊 道男
今鷹 真
岡田 珠子
木山 英雄
佐藤 一郎
島田 太郎
鷺見 洋一
野田 倬
水野 忠夫
箕浦 達二

〔執筆者〕

飯塚信雄	飯塚信正	飯塚元雄	安藤次男	安東次男	安堂信也	有永弘人	新谷敬三郎	荒木昭太郎	荒井健	阿部良雄	朝吹三吉	浅井真男	秋吉久紀夫	秋山晴夫	青柳瑞穂	青木順三	会田由	相浦杲	飯豊道男
伊藤利男	伊藤武雄	伊藤漱平	伊藤貞夫	伊藤敬一	伊藤整	一海知義	市原豊太	井田進也	石山正三	石丸静雄	石川忠久	石川敬三	石井靖夫	池田廉	池田弘子	池田英三	生松敬三	生田耕作	生島遼一
岩淵達治	岩田靖夫	岩瀬孝	岩崎良三	岩崎允胤	岩崎純孝	岩城秀夫	入矢義高	入谷仙介	入沢康夫	今村与志雄	今道友信	今鷹真	伊吹武彦	井上忠	井上正蔵	井上究一郎	稲田三吉	稲田定雄	伊藤虎丸
大山聡	大浜甫	大畑末吉	大橋健三郎	大坪一	大塚幸男	大竹敏雄	太田次男	大島利治	大沢衛	大久保輝臣	大木健	蛭原徳夫	海老池俊治	江川卓	江川英一	内田道夫	ウーテノイ	上田和夫	岩本裕
加藤一郎	風間喜代三	筧文生	筧久美子	小尾郊一	小場瀬卓三	尾上兼英	小野忍	小津次郎	小沢重男	小栗浩	小栗英一	奥野拓哉	奥野信太郎	小川超	小川政恭	小川環樹	岡田珠子	岡晴夫	大山定一
木山英雄	木村浩	木村太郎	木村彰一	北垣信行	北通文	菊盛英夫	菊池栄一	菅野昭正	河盛好蔵	川村二郎	河原忠彦	河島英昭	川口篤	河内清	河合享	加納秀夫	加納一郎	金沢誠	加藤信朗
黒田辰男	呉茂一	厨川文夫	栗田勇	栗栖継	倉田淳之助	倉田清	倉石武四郎	久米あつみ	熊谷恒彦	窪田般弥	国松孝二	国原吉之助	工藤幸雄	工藤精一郎	工藤昭雄	轡田収	草鹿外吉	金達寿	許南麒

近藤邦康	小宮曠三	小松原茂雄	小松太郎	小松勝助	駒田信二	小林善彦	小林正	小林惺	小浜俊郎	小南一郎	小島輝正	小海永二	高津春繁	興膳宏	神品芳夫	香坂順一	小池健男	桑名一博	黒柳恒男	黒田正利
佐藤亮一	佐藤正彰	佐藤文樹	佐藤輝夫	佐藤朔	佐藤晃一	佐藤一郎	佐藤章	佐々木理	桜木泰行	相良守峯	坂本鉄男	斎藤正直	斎藤久雄	斎藤光	斎藤忍随	斎藤一郎	斎藤磯雄	近藤光男	近藤秀樹	
樹下節	下位英一	清水徹	清水純一	清水三郎治	清水廣一郎	清水邦生	島田昌治	島田謙二	島田利雄	渋沢元則	渋沢龍彦	柴田鍊三郎	篠田一士	篠田浩一郎	塩谷饒	猿田恵	佐分純一	佐貫健	佐貫健	
瀨田貞二	関根正雄	関根秀雄	諏訪正	須田禎一	鈴木力衛	鈴木道彦	鈴木照雄	鈴木武樹	鈴木信太郎	杉山好	杉富士雄	杉捷夫	新村猛	進藤誠一	新庄嘉章	信貴辰喜	白旗信	白井浩司	生野幸吉	朱牟田夏雄
竹田復	竹田篤司	竹田晃	竹内実	竹内敏雄	滝田文彦	滝崎安之助	高山鉄男	高本研一	高村智	高見英一	高原宏平	高島正明	高橋義孝	高橋健二	高橋和巳	高辻知義	高田淳	高田勇	高木卓	高木進
土井久弥	寺田透	手塚富雄	都留春雄	坪内章	鼓直	辻昶	塚越敏	長南実	千代正一郎	田森襄	谷長茂	谷口陸男	谷友幸	田辺貞之助	田中仁彦	田中泰三	田中謙二	田中於菟弥	立間祥介	武部利男
中田美喜	中田勇次郎	中島千秋	中島長文	長沢規矩也	中沢希男	中里迪弥	永川玲二	永井旦	直野敦	登張正実	戸張智雄	外村直彦	戸塚七郎	徳永康元	徳永彰作	外川継男	藤堂明保	東郷正延	道家忠道	土居寛之

中野孝次	根津憲三	原卓也	藤縄謙三	松本克巳	村川堅太郎	山本顕一
中野康存	野上素一	原宏	藤野岩友	松山納	村松暎	湯井莊四郎
中野好夫	野崎韶夫	原実	藤村宏	丸谷才一	室井庸一	横田瑞穂
永野藤夫	野崎孝	久野公	藤本淳雄	丸山愛	目加田誠	横山弘
中野里皓史	野沢協	平井啓之	藤本幸三	丸山熊雄	望月芳郎	吉川幸次郎
中鉢雅量	野島正城	平井正穂	別宮貞徳	丸山匠	護雅夫	吉田正巳
中村真一郎	野田倬	平岡武夫	ヘルプスト	丸山昇	森川晃卿	吉村忠典
中村正	野々山	平岡篤頼	星野慎一	丸山政男	森田貞雄	吉原武安
中村融	野村琢一	平岡昇	前嶋信次	三浦逸雄	森本覚丹	淀野隆三
中村光夫	芳賀徹	平田次三郎	前田敬作	三浦靱郎	森本和夫	米川和夫
中村雄二郎	萩原弥彦	平野敬一	前野直彬	水野忠夫	森安達也	林晃相
中山恒夫	橋口倫介	平松幹夫	真木三三子	水野亮	矢内原伊作	黎昶波
成瀬駒男	橋本一明	福井芳男	榎田啓三郎	美田稔	柳富子	渡辺明正
南原実	橋本堯	福岡星児	増田涉	水戸善乗	山口清	渡辺格司
新島淳良	橋本福夫	福島吉彦	拈本洋子	南信四郎	山口琢磨	渡辺一民
西義之	橋本文夫	福永武彦	松枝茂夫	箕浦達二	山下肇	渡辺淳
西尾章二	花房英樹	福原麟太郎	松下和則	宮崎嶺雄	山田齋	渡辺照宏
西川正身	花輪光	福本雅一	松平千秋	宮本陽吉	山田肇	渡辺守章
西田実	浜川祥枝	藤井一行	松谷健二	三輪秀彦	大和邦太郎	渡辺義愛
西村富美子	浜口乃二雄	富士川英郎	松浪信三郎	武者小路実光	山内義雄	
二宮敬	林穰二	藤田祐賢	松村昂	村上哲見	山室静	

凡例

〔本辞典の構成〕

- ①本文(第一部) 人名および主要な作者不詳作品。第二部 各国文学史および主要な流派、様式、文学研究法)
- ②世界文学年表
- ③ノーベル文学賞受賞者一覧
- ④索引(和文人名、欧文人名、作品、事項、新聞・雑誌)

〔見出し〕

- ①人名については、原則として日本人の姓(ファミリー・ネーム)に相当する部分を太字(ゴシック)で表わし、日本人の名(イニシャル)に相当する部分を細字で表わした。

例 シェイクスピア ウィリアム

- ②慣用により、名の部分で通用しているものについては、名の部分を太字で表わし、姓の部分は中黒記号(・)を用いて細字で表わした。例 ダンテ・アリギエーリ

- ③ハンガリー人名については、日本人名の場合と同様、姓・名の順とし、姓を太字で表わした。

例 ベテーフイ・シャーンドル

- ④中世などにおける人名のように慣用により、姓・名あるいは地名などを続けて呼ばれる場合は、すべて太字で表わした。

例 ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク

- ⑤中国および朝鮮については、姓・名をともに太字で表わし、その下に日本語読みのルビを付した。

例 李白 はく 許南麒 なま

- ⑥中国においては、本名のほか、号および字(あざな)で通用している項目もあり、いずれを本項目とした場合も、他方を「見よ項目」として立てた。

- ⑦東南アジアについては、慣用で、姓・名を続けて呼ばれるため、ともに太字で表わした。ヴェトナムについては、その下に漢字名を付した。例 グエン・ズー(阮攸)

- ⑧原則として本名を見出し語としたが、慣用で、筆名、別称などで通用している場合は、これを見出し語とし、本文中に本名を記した。また、「見よ項目」を併用した場合もある。

- ⑨同一人物に二通りの呼称があり、ともに通用している場合には「見よ項目」を併用した。

例 ロルカ ↓ ガルシア・ロルカ

〔人名原綴〕

- ①クリスチャン・ネームなどのミドル・ネームは、できるだけ簡略にした。

- ②ロシア・ソヴェトについては、父称を省略し、頭文字のみを記した。また力点を付してある。ただし、和文にはフル・ネームを用いた。

例 トルストイ レフ・ニコラエヴィチ Мел H. ТОНЦОВИ

- ③イギリス、アメリカについては、たとえば T. S. ELIOT のように本国において名、クリスチャン・ネームなどが省略されて通用しているものは、見出しの語の下の和文細字の部分はこれに従い、原綴には正規の綴りを採用した。

例 エリオット T・S THOMAS STEARNS ELIOT

- ④古代ギリシアなどのラテン文字以外の人名は一定の転写方式(別項「特殊文字のラテン文字転写法」参照)によりラテン文字に書きかえた。ただし、ロシア・ソヴェトについては、ロシア文字をそのまま採用し、人名(欧文)索引のみを別項の

方式に従ってラテン文字に書きかえた。

⑤中国はウエイド方式により、朝鮮は、朝鮮語学会（一九四五
年以前）、韓国語学会、朝鮮科学院（北朝鮮）の折衷転写法に
よりラテン文字を付した。

⑥本辞典ではロシア・ソヴェトを除き、原綴はすべてキャピタ
ル体を用いたため、ドイツ語の W は w に置きかえてある。
ただし、人名（欧文）索引は普通の表記を用いたため W を
使用した。

⑦分綴は諸国語において用いられている方法に従った。

〔配列〕

①見出し語（太字）の配列は五十音順によった。

②長音および中黒（・）、双柱（||）両記号は配列上無視したが、
同位置にこれら記号、長音のないものがある場合には、記
号、長音のあるものを後にした。

③濁音、半濁音も無視したが、同位置に並ぶものがある場合は
清音、濁音、半濁音の順とした。

④見出し語（太字）で区別をつけられない場合には、日本語の
名に相当する細字の部分で決定した。

〔生没年〕

①人名原綴の次に西暦により記載した。

②中国については、特に中国年号を併記した。

③生没年がともに同世紀にある場合は、没年の世紀を示す数字
を省略した。ただし、一〇世紀以前については、省略しない。

例（一六二四—一八一）（七四五—一七八七）

④生没年がともに西紀前の場合は、生年にのみ「前」を付し、
没年には省略した。ただし、西暦紀元に近い場合は双方に付
した。また紀元前後にわたる場合はそれぞれ「前」「後」を

付した。例（前五二五—四五六）（前八〇頃—前一〇頃）（前
四八頃—後一九頃）

⑤生没年が明確でない場合には疑問記号（?）または「頃」を
付し、異説がある場合は併記した。

〔本文〕

（国別）

①人名項目の記述の初めに、国別あるいは文学別の所属を可能
な限り明記して、理解の助けとなるように努めた。

②この方針に従い、古代ギリシア、ローマ関係については、現
代における地理的な区別をある程度無視して広義の古代ギリ
シア、ローマ文学の範疇に入れられる作家は、アフリカや小
アジアなどに属していても古代ギリシア、ローマの作家とし
て表記し、出身地あるいは所属する地域名を付記した。

③アラビア語作家についても同様に、出身地、所属する地域に
とらわれず、広くアラブ圏を包括し、アラブの名を冠した。

④第二次大戦後におけるドイツについては、慣用により、東ド
イツの作家には「東」を冠したが、西ドイツは、単にドイツ
とした。また東ドイツの作家のうち、東西分裂以前から文学
活動を行っていたものは単にドイツとした。

⑤第二次大戦後における朝鮮については、南北の所属を明示
し、韓国、北朝鮮とした。分裂以前は単に朝鮮とした。

（作品および年代）

①主要作家の代表的な作品を☆印を付してその項目の後に立
て、解説を行なった。

②作品の年代は、おおむね作品名の次に（ ）で記した。前後
の記述により容易に理解できる場合には、世紀を示す数字を
省略した。

③小説、詩、評論については、原則として出版年を採り、年代

だけを記したが、出版されなかった場合、出版が著しく遅れた場合などは、年代に「発表」「完成」などを付した。

④戯曲については、原則として初演年を採り、年代だけを記したが、それ以外の場合は、年代に「出版」「完成」などを付した。また作品成立よりかなり遅れて上演された場合には、出版あるいは完成年と上演年を併記したケースもある。

(記号)

①作品は、短編集中の一編まですべて『』を用いて表わし、「」は引用、新聞、雑誌などに用いた。

②本文中に出てくる人名および作品名のうち、本辞典に独立項目として収録されているものについては*印をつけた。

(地名表記)

①おおむね諸国における発音に従ったが、わが国における慣用によった場合も少なくない。

②古代ギリシア、ローマ関係の項目においては、古代ギリシア、ローマの呼称に従った。例 アレクサンドリア(アレキサンドリア) アテーナイ(アテネ)

〔外国語人名のかな書き〕

原名の発音を重視し、各国ごとに一定の方式を定めておおむねこれに従ったが、わが国において慣用の確立しているものについては機械的な統一を避け、これを採用した場合もある。原名の発音と慣用が著しく異なる場合には、そのいずれを本項目とした場合も、他方を「見よ項目」として立てた。

一、フランス

① [ɑ:] 音は (チ) とし (テイ) とはしなす。

例 THIBAUDET チボデー

② [di:] 音は (デュ) とし (ジ) とはしなす。

例 BÉDIER ベデー

③ [e] 音は (アン) とし (エン) とはしなす。

例 CALVIN カルヴァン

④ [wa] 音などは (ワ) とし (ア) とはしなす。

例 ROY ロー

⑤ [a] [ɔ] 音などは (ヤ) (ヨ) とし (ア) (オ) とはしなす。

例 TROYAT トロワイヤ VILON ヴィヨン

⑥ [aj] [ej] などの長音は (イ) とし、長音 (ー) は用いなく。

例 NOAILLES ノワイエ DELTEILS デルティエ

⑦ [o] 音は (ヌ) とし (ス) とはしなす。

例 ANNE アンヌ

二、イギリス、アメリカ

① [ɔ:] 音は (エイ) とし (エー) とはしなす。

例 SHAKESPEARE シェイクスピア JAMES ジェイムズ

② [ou] 音は (オー) とし (オウ) とはしなす。

例 POPE ポープ BURROUGHS ブロウス

③ [ey]、[rey] は (リー) とはしなす。

例 SHELLEY シェリー AUBREY オープリー

④ [ly]、[ry] は (リ) とはしなす。

例 LYLY リリ HENRY ヘンリ

⑤ [son] は (ソン) とし (スン) とはしなす。

例 RICHARDSON リチャードソン

⑥ その他、おおむねジョーンズの『発音辞典』(DANIEL JONES, 'English Pronouncing Dictionary') によった。

三、ドイツ

① wa~, we~ などは (ヴァ) (ヴェ) とした。ただし WAGNER は慣用に依りワグナーとした。例 WASSERMANN

ヴァッサーマン WEDERKIND ヴェーデキント

② ~er は (アー) とし (エル) とはしなす。

例 SCHILLER シラー MEYER マイアー

③ ~IG は (イヒ) とし (イッヒ) とはしなす。

例 Ludwig ルートヴィヒ

四、ロシア・ソヴェト

① na は (ワ) とし (ヴァ) とはしなす。例 Иа́нов イワノフ

② ~ВНН は (ヴィチ) とし (ヴィッチ) とはしなす。

例 Серафи́мович Серафимovich

③ e は te (テ) とか ve (テ) のように (エ) とし (イエ) とはしなす。例 Те́ндрако́в Тендриков

Держави́н Державин
Держави́н Державин

④ Jy は (ツ) とする。ただし Ty は (ツ) とし (ツツ) とはしなす。

例 Jýтинец Дущинтцез

⑤ Я は (ッイ) とする。ただし、前の音節がウ段の場合は (イ) とした。

例 Я́тинец Дущинтцез

⑥ Я は (シ) とし (シユ) とはしなす。例 Я́тинец Т्रीшин

五、ギリシア

① 長音は、原音に忠実ならしめるために、また最近の欧米諸国における傾向を考慮して、すべて採り入れた。ただし、原綴には、作品原綴を除き長音記号は省略した。

例 Τημίσιος トウイニャーノフ Τυτίεις ルイレーエフ

② Ph は すへて (ハ行) 音とし、(ファ行) 音とはしなす。

例 Αριστοφάνης アリストバナース Sappho サッポ

③ M は B, M, P の前にある場合は (ム) とし (ン) とはしなす。

例 Ολυπιοδωρος オリユムピオドロー

六、ローマ

① 長音は、ギリシア同様、すべて採用した。

② AE は (アイ) とし (アエ) とはしなす。

例 Caesar カイサル

③ ~AUS は (アーユス) とし (アーイウス) とはしない。

例 Gaius ガーユス

④ ~EUS は (エーユス) とし (エーイウス) とはしなす。

例 Aulus アーブレユス

⑤ G, CH は (カ行) 音で表わした。

例 Cicero キケロ Charton カリトーン

⑥ M は B, M, P の前にある場合は (ム) とし (ン) とはしなす。例 Pompeius ポムプーユス

⑦ OU は (クァ) とし (ク) とはしなす。

例 Quintus クゥイーントゥス

⑧ V は (ウ) 音とし (ヴ) 音は用いなし。

例 Ovidius オウイディウス

七、イタリヤ

① LI, RR はラ行の音を重ねて (ルロ) などとし (ッロ) (ルロ) とはしなす。例 Pirandello ピランデルロ

② GIA は (ジャ) とし (シヤ) とはしなす。

例 Giocosa ジャオーザ

③ GIO, GIO は (チオ) (ジョ) とし (チョ) (ジョ) とはしない。

例 Boccaccio ボッカッチョ Giordani ジオルダーニ

④ ~GNA, ~GNO は (ニャ) (ニョ) とし (ニァ) (ニォ) とはしなす。例 Piero della Vigna ピエーロ・デルラ・ヴィニャ

例 Sapegno サペーニョ

⑤ M は B, M, P の前では (ン) とし (ム) とはしなす。

例 Montepelli ボンテンペルリ

八、スペイン

① V は すへて (ハ行) 音とし (ヴ) 音とはしなす。

例 Cervantes セルバンテス

② JUAN は (フワン) とし (ファン) (ファン) とはしなす。

例 Don Juan ドン・フワン

特殊文字のラテン文字転写法

ギリシア語

ギリシア文字	ラテン文字
A α	a (ā)
B β	b
Γ γ	g
Δ δ	d
E ε	e
Z ζ	z
H η	ē
Θ θ	th
I ι	i(ī)
K κ	k
Λ λ	l
M μ	m
N ν	n
Ξ ξ	x
O ο	o
Π π	p
Ρ ρ	r(rh)
Σ σ(s)	s
T τ	t
Υ υ	y
Φ φ	ph
Χ χ	ch
Ψ ψ	ps
Ω ω	o
ο υ	ou(ū)
Α ᾶ	ha
Ε ἒ	he
Η ἦ	hē
Ι ἰ	hi
Ο ὀ	ho
Υ ῦ	hy
Ω ῶ	hō

ロシア語

ロシア文字	ラテン文字
А а	a
Б б	b
В в	v
Г г	g
Д д	d
Е е	e
Ё ё	ë
Ж ж	zh
З з	z
И и	i
Й й	j
К к	k
Л л	l
М м	m
Н н	n
О о	o
П п	p
Р р	r
С с	s
Т т	t
У у	u
Ф ф	f
Х х	kh
Ц ц	ts
Ч ч	ch
Ш ш	sh
Щ щ	shch
Ъ ъ	,
Ы ы	y
Ь ь	,
Э э	e
Ю ю	ju
Я я	ja

アイスキネース Aischines (前三九〇

頃—三一五頃)ギリシアの雄弁家。前三四八年、アテーナイの和平使節に選ばれて名をあげた。以後親マケドニア政治の代表的弁士としてデーモステネースと激しく言辞を競う。このライバルをたたえる黄金の冠寄贈の件に反対、後世に残る名演説を展開したが、敗れ、ロドスに退いた。現存する演説は三。(風聞喜代三)

アイスキュロス Aischylos (前五二

五一四五六)ギリシア三大悲劇詩人の第一。アテーナイの西二〇キロにある有名な聖地エレウシースの神官の家系で、地主であったエウポリオンの子。早くから演劇の競演に加わり、すでに二六歳の頃、初上演を認められた。以降およそ九〇編に及ぶ作品があり(そのうち作品名の伝わるもの七九編)、前四八四年(四一歳)の初優勝以後一三回優勝したといわれるが、現代に完全に伝わるものは、最後の

作品『オレスティア』三部作(もともと第二部『供養する女たち』は冒頭が欠け、他にも欠陥がある)のほか『ペルシアの人々』(四七二)、オイディプース王の二子の争いと死を扱うテーバイ伝説『テーバイを攻める七将』(四六七)、『縛られたプロメテウス』、ダナオスの五〇人の娘たちの伝説『救いを求める女たち』

にすぎない。このほかに多数の断片(大部分はごく短い)が引用や発掘されたパピルス片から取り返されていて、なかでも二つのサテュロス劇『漁網引き』と『イストモス祭におもむく者ども』の断片には、昔からサテュロス劇の名手とされたアイスキュロスの面影がうかがえて興味深い。

ギリシア劇の常例では一度の競演に各自四編を上演したのであるから一三回の優勝によって五二編の彼の作品が優勝の栄誉をえたことになるわけで、優勝率は五割を越え、大きな人気をえていたことを示す。しかし、晩年には競争者として若いソポクレース(四六八年にアイスキュロスを破って優勝、二七、八歳にすぎない)をもち、アイスキュロスが再三シチリア島におもむき、ついにはそこで没したのも、この不満に基づくともいえるが、

同島シュラーケーサイの領主ヒエロンからの招きと、壮大な風物が詩人の共感を呼んだ、と解するのが妥当。伝説によると彼が同島ケラの海岸にたえずいた時、亀をつかんだ鷲が飛んで来て、彼のはげ頭の輝きを見て堅く光る岩と間違え、亀を高空から落としたのが当たって死んだというが、きわめて怪しい。

宗教関係出身者にふさわしく彼は身を持することが厳格で、古武士の面影を有し、非常な愛国者でもあった。ペルシア戦役の際には兄キュネゲイロスとともにアテーナイ軍に加わってマラトーンの野に戦い(四九二)、激戦の間に兄を失ったが、この出征は彼が終生最も誇りとしたところで、存命中に制作しておいたという自身の墓碑銘の四行詩にも詠み込まれている。『ペルシアの人々』は、この大戦に取材し、威勢におごり、神人を冒瀆し、天命を超えたペルシア王とその大軍が、神罰によりみじめな敗北と壊滅を喫する次第を述べるものだが、ここでも神の摂理と終局の正義の勝利、人間の分を超えた暴慢が必ず罰せられることへの信念が強く表明されている。また、ペルシア王に答える「アテーナイ市民は誰の臣下でもない、自由と独立を享受するものども

だ」との誇らかな科白は、彼の祖国に対する信仰告白ともいえる。しかし、彼の作品の最大の特徴は、同時代の墨絵の瓶画にも比較される、やや大まかながら力強い、荒々しいまでに健康な感性にみちた詩句と、雄壮な構想力、想像力の飛翔で、そのためには彼はしばしば人間世界の瑣末な出来事よりも、神々の世界、あるいは人神の交渉に題材を求め、巨人的な空想の世界を舞台上に築きあげようとする。『縛られたプロメテウス』で世界の涯の岩山に墜けられた巨人を示し、海神の娘たちを舞唱団として上せ、ゼウス神のため牝牛の形となった王女イオーを狂乱の姿で馳り出させ、彼らに至上神ゼウスの正義を問わせたのも、その一例である。

また『オレスティア』の終編『慈みの女神たち』では、デルポイにあるアポロインの神殿の奥室を模し、ここに復讐の女神たちエリーニュエスをたむろさせる。仮睡する彼女たちを呼び醒ますのは、血を求め殺された母親クリュタイメーストラの亡霊である。目ざめて絶叫しながら仇を追って走り去る幽鬼の群れは、観衆の肝を脅かしたに違いない。

これらの壮大絶大な空想にマッチして

その詩句も力にあふれ、雄渾ではあるが、時には難解で、円滑さ、優美さを欠くとされたこともないではなく、さらに巧みな合理的な、かつ複雑な構成をもち、人間性の深みをつくるとされるソポクレスの劇が、しばしば彼のものより市民の好尚に合うとされたのも、ゆえのなことではなかった。しかし、それでも彼が天成の詩人、しかも第一級の詩人であることは疑えない。*アリストテレスによると彼は悲劇の俳優の数を一人より二人に増し、また、背景や扮装などに大きな進歩をもたらしたという。その全盛期はペルシア戦役からペリクレス前のアテーナイ、墨絵とアルカイック彫刻の時代に当たり、中期ドリス式寺院建築とほぼ一致し、これらと一脈あい通ずる要素を有する。*アリストパネースの彼に対する礼讃と傾倒もこれら「よい昔」への郷愁によるところが多いといえよう。

☆オレスティア三部作 *Orestian* 『アガメムノン』『供養する女たち』『慈みの女神たち』(いずれも四五八同時上演)の三部から成る。史前の伝説時代ミュケナイの王として全ギリシアに威勢をふるったアガメムノン一家の血にまみれ、呪われた運命を扱い、その解決を試みよ

うとするもの。王の父アトレウスは兄弟テュエステースと王位継承のことから争い、ついにはその子たちを殺して父親の食卓に供えた。子のうちアイギストスだけはのがれ去り、復讐を誓う。アガメムノンの代となり、彼がトロイア遠征に総大将として一〇年間を留守にした間、その妻クリュタイメーストラを誘惑する。

舞台はトロイア落城の刹那に始まり、市民の不安とミュケナイ城中を脅かす暗い影が訴えられる。王妃は力強い巧みな言葉で長老たちの忌まわしい暗示を斥ける。やがて王の凱旋、王妃との応酬、はなやかな場面に続いて不吉な予兆、奴隷として連れて来られたトロイアの王女カサンドラーを脅かす血みどろな幻想、王の殺害、奥から現われる王妃と情人アイギストスとは、誇らかに自分たちの不義を正当化して長老たちを斥ける。以上が第一部『アガメムノン』で、続く第二部では、他国にいた息子オレスティースがひそかに帰国し、冷遇されている姉エレークトラーと父王の墓前でめぐり合う。姉弟と舞唱団との対唱の間に哀悼と悲痛から復讐の叫びへと感情は次第に激化されてゆく。二人はついに不義の母と情人を殺害する。このエレークトラーとオレス

テースの物語は、以後くり返し近代まで、作家の大きな関心をひくテーマとされてきた。第三部『慈みの女神たち』はオレステースが母殺しの咎により復讐の女神たちに悩まされる前段と、アテーナイで至高裁判所で神人の裁きを受け、赦免をえる後段から成る。(具茂一)

アイソポス Aisopos (前六世紀頃)ギリシアの作家。今日ひろく『イソップ物語』として有名な風刺的な動物説話集を創作したとされるが、この人の生涯については、ほとんど不明である。ヘーロドトスによれば、彼はサモス王の奴隷であったという。また、ブルータルコス^{*}の記すところでは、彼はクロイソス王からデルポイに派遣されたが、デルポイ人と衝突して恨まれ、ついにデルポイ人によって聖所冒瀆の罪名で死刑に処せられたという。その他、アイソポスの醜い格好とか逸話奇行の類がいろいろと伝えられているが、それらは一四世紀のコンスタンチノーブル(イスタンブール)の修道僧ブラヌーデースの編纂した『イソップ物語』の前文に記された伝記に基づくもので、後世の仮託である。

『イソップ物語』は動物を主人公とし、動物の行動や性格に託して人生の機微を

巧みに描き、一般大衆に適切なモラルを説いた説話集で、寓話文学の先駆とされる。しかし、アイソポスはその創作した寓話を書き残したことはなかったらしく、その原形については今日では、まったく不明である。今日に遺る最古の伝本はバブリオスがギリシア語のコリアムボス調の詩形に書き改めたもので、今日完全な写本が遺されているが、その後、四世紀にアウイアーヌスが、また九世紀にディアークヌスが、ラテン語詩形に書き改めた伝本もあったことが知られている。今日一般に『イソップ物語』として知られている伝本は、前述のブラヌーデースの編纂したものに由来し、その後、各国語に翻訳されて広まった。こうして流伝の歴史を経ている間に、東洋起源、特にインドに由来する寓話が数多く加えられたし、『イソップ物語』は次第に増加したことが知られる。今日『イソップ物語』とインドの諸説話集に見られるパラルレな寓話は、比較文学的に興味ある問題が多い。キリスト教のわが国への渡来とともに、説教の補助資料として『イソップ物語』が伝えられた。現在二つの

伝本があり、一つは『天草本伊曾保物語』で、簡潔な狂言ふうの口語体にラテン語から和訳され、訳文はローマ字で記されている(一九九三、天草キリシタン学寮出版)。取載の寓話は七〇編。他は文語体の訳本で、徳川初期の古版本があり、寓話六四編を載せるが、この両者の相互関係はまったく認められず、それぞれの原本も不明である。(岩本裕)

アイトマートフ Чингиз Чингиз Айматов (一九二八—) ソヴェト(キルギス)の作家。農村の古い因習に抗して愛を貫く女性を描いた代表作『ジャミールヤ』(五八)がアラゴンに激賞されレニン文学賞を受けた。社会と個人のテーマを得意とする。他に『ライバル』(五八)、『赤いスカートのポブラちゃん』(六一)など、民族色豊かなリリカルな作品を多数書いている。(原卓也)

アイヒ Аиһи (一八七八—一九五四) ソヴェト(タジク)の作家。本名サドリドジン・サイドムラドヴィチ。初め教育者として出発したが、祖国の封建制を批判する詩を書いて文学活動を開始し、タジク近代文学の創始者とされている。『オージナ』『ドフンダ』『奴隷たち』の三部作(二四—三四)と『回想』(四九—五四)は、タジク民衆の苦難にみちた歴史をリアルに描きだしている。(水野忠夫)